

令和4年度 文化芸術による子供育成推進事業
一巡回公演事業（児童劇）一



「文化芸術による子供育成推進事業 一巡回公演事業一」

我が国の一流の文化芸術団体が、小学校・中学校等において公演し、子供たちが優れた舞台芸術を鑑賞する機会を得ることにより、子供たちの発想力やコミュニケーション能力の育成、将来の芸術家の育成や国民の芸術鑑賞能力の向上につなげることを目的としています。

事前のワークショップでは、子供たちに実演指導又は鑑賞指導を行います。また、実演では、できるだけ子供たちにも参加してもらいます。



人形劇団ひとみ座の紹介

人形劇団ひとみ座は神奈川県川崎市にあります。1948年に劇団が誕生してから、「豊かな人形劇の創造」をテーマに舞台、テレビ、映画などで沢山の作品を発表してきた日本を代表する人形劇団です。

ひとみ座には全国から人形劇をやりたい人が集まってきます。ここで人形劇を考え、人形を作り稽古をして、北海道から沖縄まで日本中で公演を行っています。近年ではアジア、アメリカ、ヨーロッパなど海を越えて活動の範囲を広げています。

これまでの活動には高い評価をいただきましたが、中でも国民的番組として今も根強いファンを持つ、NHKテレビ「ひょっこりひょうたん島」は、ひとみ座の人形と優れたスタッフがいたからこそ出来た番組といえます。

〒211-0035 神奈川県川崎市中原区井田 3-10-31 人形劇団ひとみ座 <http://hitomiza.com/>

「東海道中膝栗毛」ってどんなおはなし？

日本を代表する大長編コメディ

江戸時代後期1802年より14年間、十返舎一九により8編18冊も書かれた大長編滑稽本が「東海道中膝栗毛」です。ひょんなことから当時流行のお伊勢参りに弥次喜多ドタバタコンビが出発、神田から大阪までの珍道中を描きます。

弥次喜多の時代は一大旅行ブーム

参勤交代により街道や宿場町が整備され、庶民の間でも旅行が流行しました。中でも「お伊勢参り」は定番中の定番。電車も車もない時代、それでも町民から子どもに至るまで、のんびり徒歩旅行を楽しみました。「膝栗毛」とは徒歩旅行のこと、栗毛（の馬）の代わりに膝を使って歩くという意味です。

その背景にある 待ち望まれた平和な世の中

弥次喜多の生きた江戸時代は、戦国時代の後に訪れた天下泰平の世。街道や宿場町を人々が行き交い旅行ブームとなるのも、「明日生きていられるだろうか」から「明日をどうやって豊かにしよう」と庶民が考えられるようになった証です。戦乱で埋もれていた芸能が各地で再び盛んに行われたのもまさにこの時期。平和があるから大らかに笑って生きられる。ドタバタ喜劇に込めた、私たちが子どもたちと共有したいメッセージです。



脚本／佃典彦（劇団B級遊撃隊）
演出／山本コーゾー
人形美術・演出協力／伊東亮
舞台美術／田坂晴男・本川東洋子
音楽／やなせけいこ
音響／田辺正晴
照明／石川哲次
演出助手／鈴木文
舞踊所作指導／花木雄二郎
宣伝美術／三浦佳子
制作／石川哲次

知ってますか？ ～10月1日は「国際音楽の日」です～

1977年にユネスコの要請で設立された国際音楽評議会という会議で、翌年の1978年から毎年10月1日を、世界の人々が音楽を通じてお互いに仲良くなり交流を深めていくために「国際音楽の日」とすることにしました。日本では、1994年から毎年10月1日を「国際音楽の日」と定めています。

あらすじ

まんじゅうの大食い大会で起こした大失敗から、江戸を追われてしまった弥次さんと喜多さんは、逃げるだけではつまらないと今流行りのお伊勢参りに向かう。二人の行く先々、必ず起こるとんでもない大騒動。さらに二人を執拗に追い回す役人の栗山桃右衛門や、大食い大会で何と子どもに負けてしまい傷心の相撲取り鬼の山なども加わり、伊勢までの大珍道中がはじまる――

二人の愉快な旅路を彩る 庶民の娯楽「伝統芸能」の数々

歌舞伎に講談、太鼓に三味線、果ては血回しまで、そしてもちろん人形芝居！
伝統芸能には人生を豊かにするための先人の知恵と力が詰まっています。
「堅苦しい」ものではなく「お気軽に」根付いてこそ意味のある芸能。
その場にいる人達を結び付けるコミュニケーションの潤滑油です。
この国の各地域にあるたくさんの魅力に触れながら、みんなでわいわい楽しみましょう。



弥次さん

喜多さん

ワークショップ

弥次さん喜多さんが
通にかかった村の
子どもの役で出演！

1. 人形を作る

2. 人形を動かして、
弥次さん喜多さんと
一緒にお芝居をする

3. ご当地ならではの
クイズを出題する



ゆっくりのんびり道中記 それぞれのものがメッセージ

失敗しても何のその。マイペースに旅を続ける弥次さん喜多さん。
生きているだけで、私たちはかくも人生を豊かにできるのだと、
多くの子どもたちに感じてほしいと思っています。



東海道五十三次、東海道の宿場町